

右文尚武

(2学期始業式校長挨拶より)

長い夏休みが終わりました。夏休みは、物事を始めるに当たっての一つのチャンスであり、その意味で、終業式で三心「発心、決心、持続心」についてお話ししました。

さあ、やるぞ、と心を奮い立たせるのが「発心」

やると心に決めたことを実行するのが「決心」

そして、その決心をやり続けるのが「継続心」

小さな努力をコツコツと、久しく積み重ねること。これこそが有志竟成の本質なのだということもお話ししました。

さて、2学期を始めるに当たり、夏休みを振り返ることは大事なことです。

この夏休み中、

全国大会あるいはインターハイに出場の柔道、弓道、ボート、ヨット、放送
今報告のあった吹奏楽部、ワールド・ロボット・オリンピック

さらに、県主催の将来設計ガイダンスや思考力養成セミナーへの参加、
県立大のサイエンスカフェ、医師を目指す高校生に外科手術を模擬体験してもらう
「ブラックジャックセミナー」、各大学のオープンキャンパス
1・2年学習合宿への参加など

他にもありましたが、これらのいろんながんばりが学校に、報告され、うれしかったです。残念なところもある人が多いとは思いますが、それ以上に、参加して努力したことはこれからの君たちにとって大いなるエネルギーになると確信しています。

さらに、各部の遠征、試合や大会、各学年の補習等いろいろなところでがんばってくれました。

お疲れ様でした。ところで、結果を急いではいけませんよ。

この夏のがんばりは、秋以降にある日突然、出てくるのだから楽しみにしてこの後も努力を続けてください。

さて、今日から2学期、この始業式では皆さんに校標の一つである右文尚武についてお話しします。

漢字の【右】には、いわゆる右側の「1 みぎ」の他に、「2 たつとぶ」という意味があります。「右文」の右は、この意味であり、右文は、学問・文学を重んじ尊ぶこと、となります。

また、漢字の【尚】しょうには、「まだ。なお」の他に、「1 重んじる。たつとぶ」という意味があります。「尚武」の「尚」はこの尊ぶの意味で、「右文」の右と同じ意味「尊ぶ」を表しています。

従って、尚武(しょうぶ)は「武芸を重んじること」という意味。

結局、右文尚武とは、文と武の両方を重んじ兼ね備えること、を表した言葉です。

なお、いそしみて(勤しみて)は熱心につとめ励む。力を尽くして励むことです。

校歌の一節「右文尚武いそしみて」は、学習と部活動を重んじ、尊びて力を尽くして励めということになります。

校標は校歌に4回も登場しますから、もはや校歌は校歌でもあるとってよいか

もしれません。この校歌は、明治 45 年、当時本高教諭だった藤原正先生が作られました。開校 10 年目の校歌制定で当時、27,8 才の藤原先生苦心の賜物であったようです。この作詞者である藤原正先生は、明治 17 年山形県生まれ。山形中学(現山形東高校)から東京の中学に移り、そして一高、東京帝国大学哲学科を卒業し、明治 42 年に新潟の新発田中学教諭、その後、明治 43 年 11 月本荘中に着任。専門は哲学であるが、本高では英語を教えています。

藤原先生は授業の時、よく英文の警句ことわざや英詩を朗読されたとのこと。記録に残っているものを一つ紹介します。

You can take a horse to water but you can't make him drink.

『馬を水飲み場へ連れていくことはできるが飲ませることはできない』

「行動は強制できても、心の中の意欲は強制できない」ということか。

ところで、右文尚武という言葉はいつからあったのかというと、少なくとも 1800 年代にはあったようです。確実なところをお話ししますと、

江戸幕末の三大剣士の一人で千葉周作という剣豪がいます。この方は、剣道部顧問加賀谷先生によると、身長 180cm、加賀谷先生より少し小さいけど、その強さは雲の上のような人、とのことでした。千葉周作の北辰一刀流道場、玄武館は 1822 年に始まりますが、数多くある道場のなかでも人気が高く、全国から門下生が集まる大道場でした。理由は、これからは武芸だけではだめだと、学問の必要性をいち早く掴んで文武を奨励したからです。この道場玄武館に隣接して高名な儒学者東條一堂の「瑤池塾(ようちじゅく)」で漢学を学ぶことを推めました。つまり、門下生に玄武館で剣術を、瑤池塾で学問を学び、文字通り右文尚武を実践させたのです。その結果なのでしょう、玄武館は有名な幕末の志士たちを数多く輩出しています。

のちに、この隣り合う玄武館と瑤池塾跡地には「その両者をた讃える(顕彰する)ために「右文尚武」と書かれた碑を建てられました。この地には、文武の修行の空気が昔から満ちていたともありますので、玄武館及び瑤池塾が栄えていた頃には「右文尚武」という言葉があったと考えられます。

さらに、当時この玄武館、瑤池館周辺には蘭学者たちが、種痘所を開いています。この種痘所はのちの西洋医学所であり、東京大学医学部の前身である。

東京帝大在学中の、才気あふれる、意気盛んな学生である藤原先生がこうしたことから右文尚武の重要性を察し、校歌に採用したのではないかと推察しています。

ところで、余談になりますが、玄武館、瑤池塾で右文尚武を実践した幕末の志士として土佐藩(高知県)出身の坂本龍馬がおります。この坂本龍馬を郷土の誇りとする高知県にある進学校土佐高校も右文尚武を掲げておりますが、それは必然のような気がします。

このように右文尚武は 200 年以上も前からある普遍かつ必要不可欠なテーマであり、これを校標にしている学校は全国に多数あります。同義として、文武両道、あるいはペンと剣の旗の下というように、表現は変わっても校標を同じくする学校はとても多いのです。

本高が、これを校標にしていることは誇りとすべきことであり、人格の完成のためにも是非とも勤しんでもらいたいものです。部活に入っていない生徒は、部活に変わる何かを見つけて、学習だけでは学び得ないものを日々求めてください。

恥ずかしい話ですが、私自身、「右文尚武」は今まで知りませんでした。本校に来てこの言葉に出会えたことをうれしく、また、誇りに思います。皆さんにも今一

度、右文尚武を自分にとって大事なものののだ、という認識を持ってほしく思います。

さて、長々とお話しした理由の一つに、みんなにもっと学校を誇りに思ってもらいたい、好きになってもらいたいということがありました。

歴史的にも伝統的にもそしていろんな意味でいい学校です。もっともっと誇りに思い、好きになってください。

母校愛を育ててください。

好きになればそこでがんばれます。好きな場所でこそ、人間はがんばれるんです。

好きになれば有志竟成が近づきます。

私たち職員も本荘大好きです。「好きこそものの上手なれ」という諺もあります。

いずれにしても「好きであること」は、目標達成にとって、「必要にして欠くことのできないもの」なのです。

最後です。

2学期は動から静へと変わる学期といいました。最初の学級対抗では大いに真っ赤に燃えて、終わったら後は夢の実現に向けて青く深く自身を燃やしてください。

この後、教室に「右文尚武いそしみて」を掲げてもらう予定です。

これは、書を書道部の皆さんに、表装を美術部の皆さんにお願いしました。とても立派なものを作り上げていただきました。とても感謝しています。ありがとうございました。

「右文尚武いそしみて」を、常に目にして、自問自答しては自らを鼓舞してください。

それでは、2学期のがんばりを期待しています。

(完)